

八ガ(高島小プール)遺跡発掘調査現地説明会資料

と き：平成13年 4月14日(土)

ばしょ：八ガ(高島小)遺跡発掘調査現場

八ガ遺跡の発掘調査は、敷地構造に伴う周囲壁部分とプール建設予定部分を2年度に分けておこなってきました。壁部分は平成10年度、プール建設予定部分は平成12年度です。当地は賞田廃寺や幡多廃寺などの古代寺院が集中することや、国府市場の地名からも古代における地方の中心地である国府(備前国府)の所在地であったと推定されてきました。したがって、八ガ遺跡からも国府に関連する遺構・遺物が出土する事が予想されました。

遺構面は4面です。最も古いのは7世紀の遺構面で、比較的小さな柱穴と溝が検出されました。柱穴の配置には規則性はなく、溝も地形に合わせたものでした。したがって一般的な集落であったと思われます。

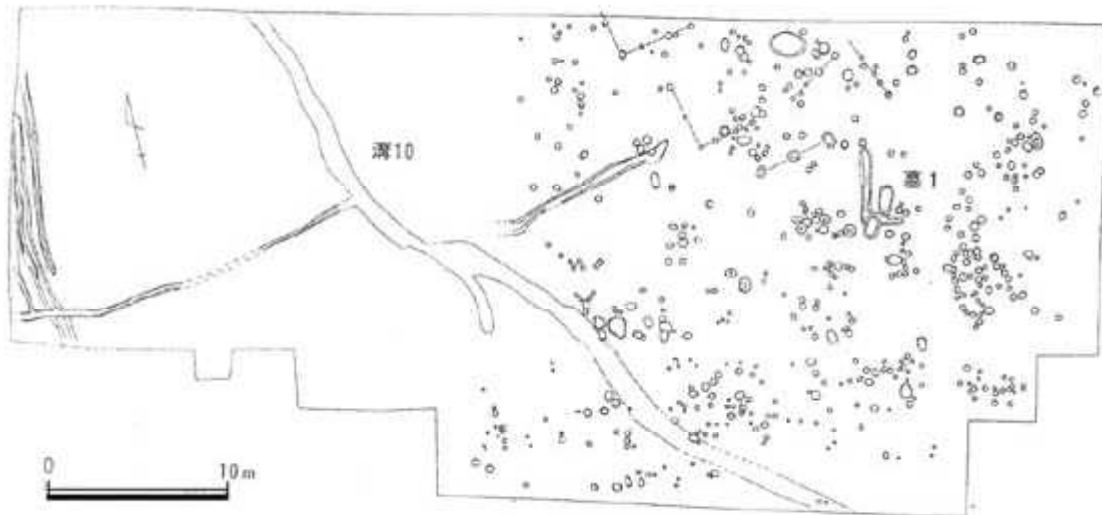
次は8世紀(7世紀末?)から12世紀の遺構面で、方形の掘り方の柱穴が整然とならんでおり、区画をおこなった溝も認められます。この面は、さらに3小期に分けられますが、東西幅30mの部分に溝で囲った内郭と、その周囲を推定108mで囲った外郭といった区画構造は踏襲されています。内郭部分の大半は調査区の北側と思われますが、軒瓦のほか瓦塔・瓦鉢・泥塔・灯明痕の土器が出土していることから寺院であったと考えられます。しかも三彩陶器や羊形硯などの当時の最高級品も出土していることから、郡レベル以上、おそらく国府に關係する寺院と考えられます。また外郭からは、るつぼやフイゴ羽口などが出土しており、工房的な空間であったと考えられます。以上のような性格の遺構は、今のところほかに例がないため、慎重な検討を要しますが、おそらく国府中心地の様相の一端を示していると思われ、当遺跡はあまり実態のわかっていない国府付属寺院といわれる国府寺である可能性が最も高いと思われま

す。12世紀以降も遺構が形成され、土師器を焼いたと思われる、窯跡や、柱穴・溝等が検出されました。当地点が一般的な集落になったのか、それとも寺院地として存続しているのかは明確ではありませんが、16世紀の奉納を目的としたと思われる銅鏡が出土したことから、寺院地の一角であることも予想されます。17世紀以降は水田化され、とくに18世紀には包含層を切り崩した、かなり大規模な水田造成をおこなっています。

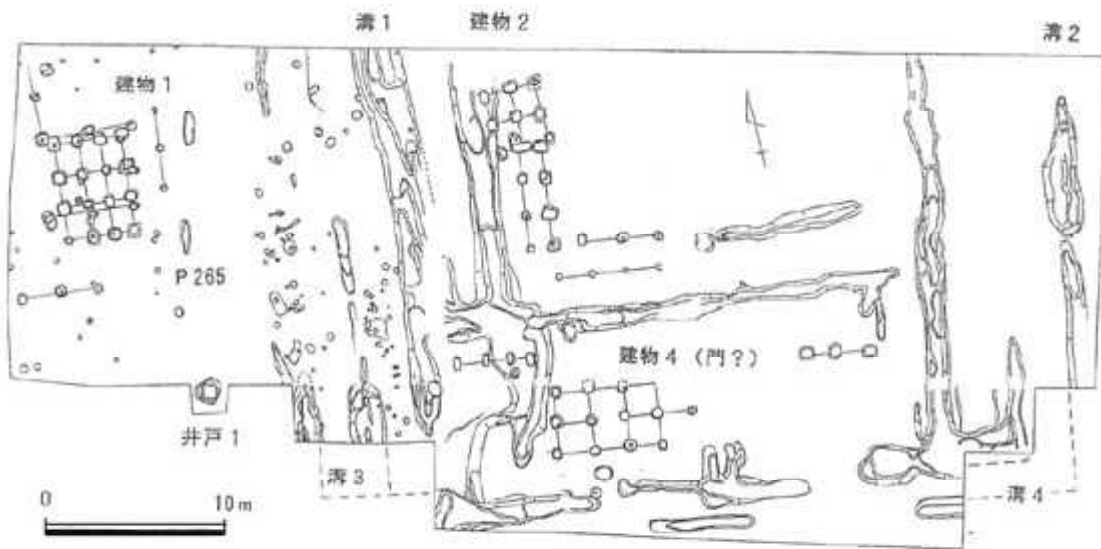


調査地点の位置

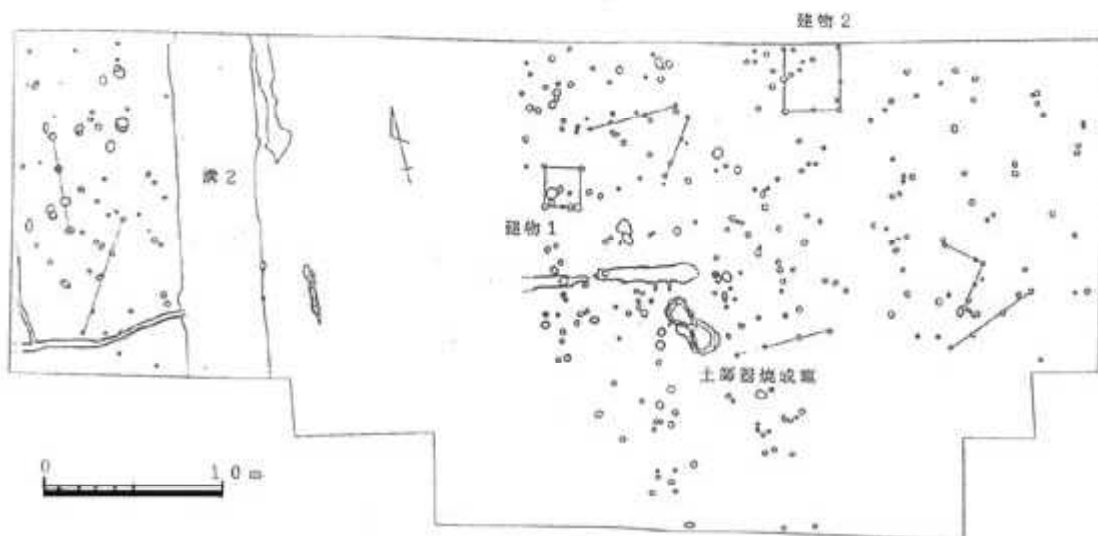
調査区遺構平面図（プール建設予定地部分）



7世紀遺構面

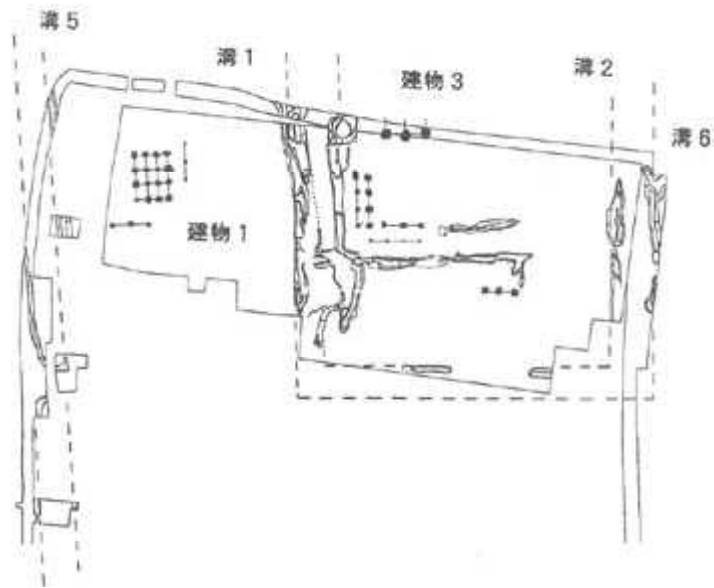


8世紀～11世紀遺構面

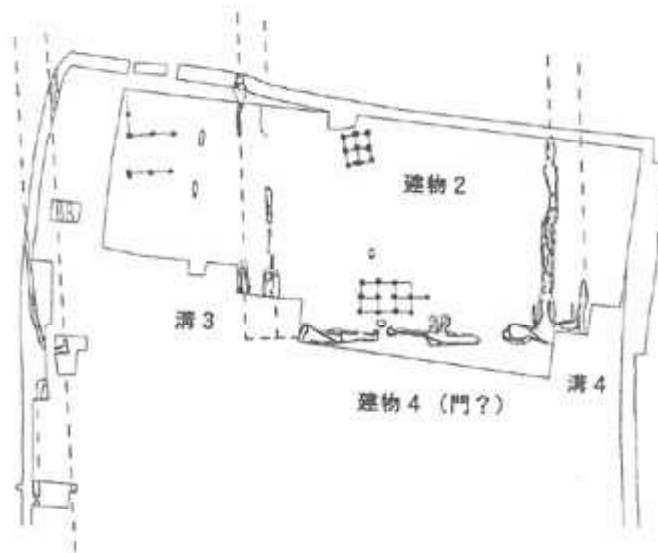


中世遺構面

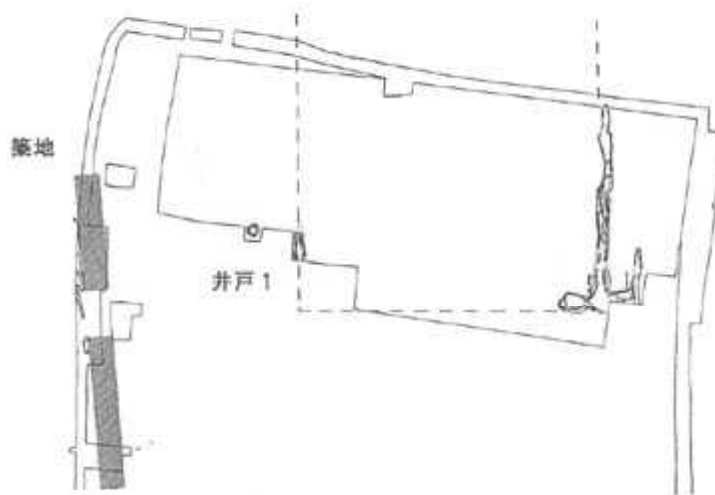
調査区全体図



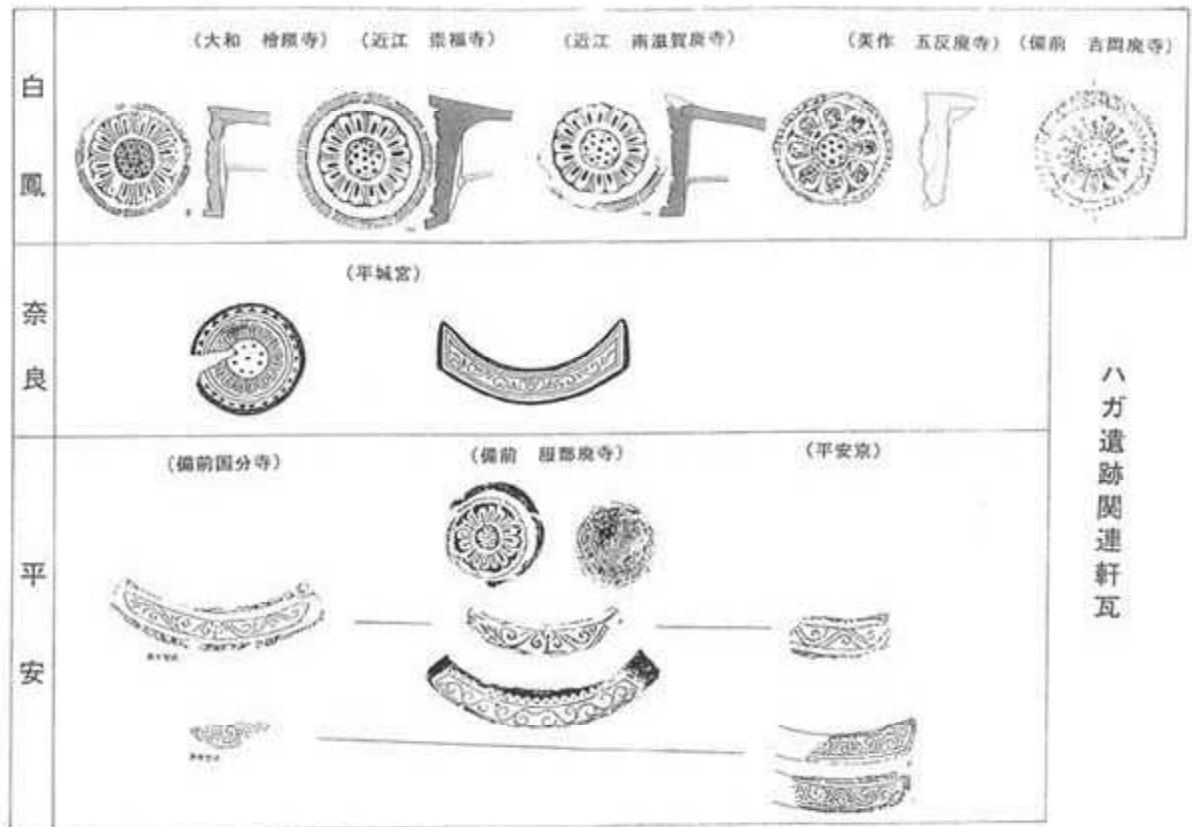
8世紀～9世紀前半遺構面



10世紀前半遺構面



10～11世紀遺構面



八方遺跡 関連軒瓦

